『On-line みんなで法華経を学ぼう！』 vol.31 Oct.2024

—— Let's embark on a journey to discover our own "perspective on the Lotus Sutra"！

（"法華経観"を見つける旅に出よう！）

『妙法蓮華経 普賢菩薩勧発品第二十八』 （本門・流通分）

○『又如来の滅度の後に、若し人あって妙法華経の乃至一偈・一句を聞いて一念も隨喜せん者には、我亦阿耨多羅三藐三菩提の記を與え授く』 （法師品 二〇二頁 終五行）

○ 『其の習學せざる者は 此れを曉了すること能わじ』（方便品 八十二頁 四行）

○ 「習学」の３つのステップ「聞解・思惟・修習」

○『若し聞解し思惟し修習することを得ば、必ず阿耨多羅三藐三菩提に近づくことを得たりと知れ』 （法師品 二〇九頁 三行）

○『十分の一でも実践できれば、また一つでも徹することができれば、立派な精進』

◇ ◇ ◇

＜陀羅尼品の復習＞

・五種不翻 （P278・7行／P198・2行）

仏教経典を中国語に翻訳した人たちは、どうしても翻訳しないほうがよいと判断されたものは、原語の音（おん）に似た漢字を当ててすませ、わざと原語のまま残しておいたのです。これを〈**五種不翻**（ごしゅふほん）〉といいます。❶インドにあって中国にない動植物や伝承の魔物などの名。「迦楼羅・かるら、緊那羅・きんなら」など。❷一語に翻訳すると原意が十分に尽くされないもの。「陀羅尼・だらに」など。❸神秘的な言葉。秘密の語。「陀羅尼品の神呪」など。❹昔からの習慣に従ったもの。「阿耨多羅三藐三菩提・あのくたらさんみゃくさんぼだい」など。❺翻訳すれば、真の意味を失うもの。「仏陀・菩提」など。

・説法者を悩乱する罪 （P319・1行／P232・1行）

法華経の説法者（実践者）を悩ます者の大罪。頭割れ、親殺し、釈尊を殺す大罪と同じ。

『説法者を悩亂（のうらん）せば 頭（こうべ）破れて七分になること阿梨樹（ありじゅ）の枝の如くならん 父母を殺（しい）する罪 ～ 亦油（また あぶら）を壓（お）す殃（つみ） ～ 斗秤（としょう）をもって人を欺誑（ごおう）し 調達（ちょうだつ）が破僧罪（はそうざい）の如く 此の法師を犯さん者は 當（まさ）に是（かく）の如き殃（つみ）を獲（う）べし』

この総持真言に背（そむ）いて、法華経を説き、実践する人を悩ます者は、その罰として、地に落ちると枝が

七分八裂（しちぶんはちれつ）に細かく割れる阿梨樹（ありじゅ）の枝のように、頭がバラバラに砕（くだ）けるでありましょう。法の実践者を悩ますこの罪は、両親を殺す大罪と同じであり、油を搾（しぼ）り出す時、石臼（いしうす）にはびこる無数の虫たちを殺しながら石臼を引く罪であり、または、人を悩まし、猜疑心（さいぎしん）を起こさせてしまう秤（はかり）や計算をごまかす罪、そして提婆達多（だいばだった）が釈尊を殺害しようとして釈尊教団の和合を乱（みだ）した罪と同じ大罪にあたります。法の実践者を害する者は、この大罪を犯し、その罰（ばつ）を自ら受けることになるでしょう。

◇

＜妙荘厳王本事品の復習＞

・家庭での信仰実践と指導的立場の者の信仰　(P327・1行／P239・1行)

この品では大変現実的な、身近な問題について説かれています。**『家庭における信仰の問題』**です。つぎに**『指導的立場にある人の信仰の問題』**です。

・「物質生活」より「精神生活」　(P328・7行／P240・4行)

何の不自由も不足もない王家の子息が出家することは、**〈物質生活より精神生活の安らかさが、はるかに勝っている〉**を語っているのです。～ **〈精神生活の転換〉**という意味です。

・神変とは　(P343・1行／P252・2行)

この神変というのは、**〈子どもたちの生活態度の、びっくりするような変わり方〉**を意味するのです。

【空中を歩き、座り、寝る】⟹仏法によって**『空』**を悟れば、自由自在になる。(P345・3行／P254・3行)

【頭や足から、水・火を噴き出す】⟹『一念三千』。己の一念で現象は変わる。**「三界は唯心の所現」**と同義。

【虚空を覆う巨大。次に豆粒のように小さく】⟹『人間の本質と現実』の両面を知る。

本仏と一体なる。一方、自分は小さな人間。

【空中で消滅。忽然と地上に現われる】⟹『空』を知るだけでなく、**『現実』**を踏まえる。

現実を踏まえて生活を正していく。

【地に入ること水の如く、水を歩くこと地の如く】⟹仏法を悟った者は、人を自由自在に教化。

・子に向かって親が合掌　(P348・3行／P256・6行)

『時に父～ 合掌して子に向って言(い)わく』　(三七五頁　四行)

父が子に向かって合掌したことに、よく注目しなければなりません。～ それにしても、子に対して手を合わせるというのはなかなか出来ることではありません。誠に尊い光景であります。

・理想論だけでは世は救えない　(P351・終4行／P259・7行)

理想論ばかりでは世の全ての人を救うことはできません。まず**『方便』**をもって教えに引き寄せなければならぬ人が、たくさんあるのです。

・一眼の亀の浮木の孔に値えるが如し　(P359・終5行／P265・終3行)

「盲亀（もうき）の浮木（ふぼく）、優曇華（うどんげ）の花咲くに会う思い…」

・示教利喜　(P366・4行／P271・4行)

【示・じ】　教えのあらましを示すこと。

【教・きょう】理解の準備ができたら、もう少し詳しく教えの意味を説く。

【利・り】　教えを実践して得られる功徳を説く。実践させて利益（りやく）を味あわせる。

【喜・き】　教えを受持することに喜びを感じ、生きがいを覚える。

・因縁あればこそ (P378・4行／P281・4行)

ましてや父母・兄弟として生まれ合わせたり、（夫婦・めおと／となったり）仲の良い友達となったり、あるいは一緒に仕事をしたり、善知識として自分を精神的に導き、人格完成へと誘（いざな）ってくれる人に会うことは、並々ならぬ因縁があればこそです。いわゆる**〈大因縁〉**であります。それを思えば、父母・兄弟・親類・友人・師弟・同僚等々、親しく接する人々、さらには同信の仲間を決して疎（おろそ）かにしてはならないという仏さまの教えが、しみじみと納得できるのであります。

・奇跡の意味 (P390・2行／P291・5行)

（二王子が奇跡の現象を現したことは）仏法を学び、信ずることによって、人格が一変し、したがって**日常の行ないがすっかり変わった**ことを意味しているのです。

・実証によるみちびきが第一 (P390・終4行／P291・終5行)

手っとり早いのは**身をもってする実証**です。自分自身が仏法を信じ行なうことになってからこのように変わったのだという**生きた事実**を見せることが第一です。～

・家族をみちびくには (P392・6行／P292・終3行)

家庭内の人を仏の教えに導くには、いくら教えの内容を説明し、理論的に納得させても、本人の**生活態度がかわらない限り**、なかなか効果のあがるものではありません。～ 家族を導くことは、やさしいようで一番難しいことだと言えましょう。

・指導的立場の人の信仰 (P397・6行／P296・2行)

指導的立場にある人が正しい信仰にはいった場合、その影響がどれほど大きなものであるか、～ その人の人格は必ず多くの部下の人たちに良い影響を与えます。

◇ ◇ ◇

＜普賢菩薩勧発品のあらすじ＞

【普賢菩薩が東方の世界からやって来る】――

【三八二頁 一行】 釈尊が『妙荘厳王本事品』を説き終えられると、人々を自由自在に救う大徳を具えていることで知られている**普賢(ふげん)菩薩**が、無量無辺という数えきれない**大菩薩**たちと共に、東方の世界から娑婆世界にやって来ました。

この大菩薩の一行が東方の世界から娑婆世界へ向かう途中、通過する国々では国中が感動で打ち震え、宝石のような蓮華の華が雨のように降りだしました。そして無量百千万億という無数の妙なる音楽を奏（かな）でて、一行を讃嘆・供養したのでした。

【三八二頁 三行】 そして無数の天人・竜神・夜叉（やしゃ）・乾闥婆（けんだつば）・阿修羅（あしゅら）などの鬼神たちや人間、人間以外の生き物たちは**普賢菩薩**と**大菩薩**の一行を囲んで、かしずき礼拝したのでした。そして**普賢菩薩**は様々な神力を現わしながら娑婆世界の霊鷲山に到着したのでした。到着すると**普賢菩薩**は釈迦牟尼仏のみ足に額を付けて礼拝し、釈尊の周囲を右回りに七回周り、仏徳を讃嘆する最高の礼を尽くして世尊に申し上げました。

【仏滅後、どうすれば『法華経』を得ることができるか？　普賢菩薩が問う】――

【三八二頁 終五行】「世尊よ。私は**宝威徳上王仏**(ほういとく じょうおう ぶつ)の国におりましたが、はるか遠い娑婆世界で、世尊が法華経をお説きになられていることを伺い、無量無辺百千万億という無数の菩薩たちと共に法華経を拝聴するためにやってまいりました。どうか私どものためにも法華経をお説き願います。／（『若（も）し善男子・善女人、如來の滅後に於て云何（いかに）してか能（よ）く是（こ）の法華經を得ん』）もし、仏さまがご入滅なされましたら法華経を得ることはできなくなります。その時、善男子・善女人は、**どのようにすると法華経を得ることができるのでしょうか**。お教えください」

【『四法成就』こそ、『法華経』を得る法】――

【三八二頁 終行】/【経典三〇頁 終二行】すると**釈迦牟尼仏**は**普賢菩薩**にお答えになりました。

（『佛,普賢菩薩に告げたまわく,～　四法を成就せば、如來の滅後に於て當（まさ）に是（こ）の法華經を得（う）べし』）「もし善男子・善女人が、次の**四つのことがら**をしっかりと行えば、如来の滅後においても法華経を掴（つか）んだことになり、法華経の真の功徳を得ることが出来ましょう」

その四つとは、／（『一には諸佛に護念せらるることを爲（え）』）**第一**に、『**諸仏に護念されているという絶対の信念を持つこと**』。／（『二には諸（もろもろ）の德本（とくほん）を植え』）**第二**に、『**いつも様々な善い行いをするように心がけること**』。／（『三には正定聚（しょうじょうじゅ）に入（い）り』）**第三**に、『**いつも正しい信仰者の仲間に入っていること**』。／（『四には一切衆生を救うの心を發（おこ）せるなり』）そして**第四**に、『**一切衆生を救おうという心を起こすこと。すなわち、いつも社会全体を良くすることを目指すこと**』。／（『四法を成就せば、如來の滅後に於て必ず是（こ）の經を得ん』）これらの四つのことを善男子・善女人が満足に行えば、私がこの世を去った後においても、**法華経**を必ず自分のものとすることができます」　**――【四法成就・しほうじょうじゅ】**

【末法の時代の法華経実践者を守護することを、普賢菩薩が誓う】――

【三八三頁 四行】/【経典三一頁 終三行】その時、**普賢菩薩**は**仏さま**に申し上げました。

（『爾（そ）の時に普賢菩薩、佛に白（もう）して言（もう）さく、世尊、後の五百歳濁惡世の中に於て』）「世尊よ。私はお誓い致します。もし**末法の時代**である**『後五百歳・闘諍堅固時**(とうじょうけんごのとき)**』**という濁悪世（じょくあくせ）において法華経を受持する者がいたならば、／（『我當（まさ）に守護して其の衰患（すいげん）を除き、安穏なることを得せしめ、伺（うかが）い求むるに其の便（たより）を得る者なからしむべし』）私はその者をしっかりと守護致します。その者に降りかかる様々な禍（わざわい）を取り除き、いつも安穏に教えを実践できるように守ります。もし何者かが法華経実践者の修行・精進を妨（さまた）げたり、隙（すき）を狙（ねら）って憑（と）り魅（つ）こうとし、迫害を加えようとする者がいたならば、そのことが着手できず、その手がかりすら掴（つか）めぬように致しましょう」

【三八三頁 七行】「魔や魔の子、女の魔、魔の手下ども、そして魔に憑（と）り魅（つ）かれた者たち、さらには夜叉（やしゃ）や羅刹（らせつ）など人々を悩ます悪鬼どもが悪事をしようとしても、その手がかりすら掴（つか）めぬように致します」

【三八三頁 終三行】（『若（も）しは行（ゆ）き若しは立って此の經を読誦せば、我爾（われ そ）の時に六牙（ろくげ）の白象王（びゃくぞう おう）に乗って、大菩薩衆と俱（とも）に ～ 自（みずか）ら身を現じて供養し守護して』）「その人が立っている時、または歩いている時に法華経を読誦するならば、私は**六牙(ろくげ)の白象に乗って大菩薩たちと共にその場所に現われ**、その人を供養し、守護して、その人の修行・精進が滞りなく安らかに行えるよう致しましょう。なぜそうするのかと言えば、ひとえに法華経の教えに感謝するためであります」

【三八四頁 一行】（『若（も）し法華經に於て一句・一偈をも忘失（もうしつ）する所有（ところ あ）らば、我當（われ まさ）に之（これ）を教えて與共（とも）に讀誦し、還（かえ）って通利（つうり）せしむべし』）「ある人が静かに坐して、この法華経について思惟（しゆい）し、考えを深めるならば、私は白象に乗ってその人の前に現われましょう。もしその人が法華経の一句または一偈（いちげ）を忘れてしまうようなことがあれば、私はそれを教えてあげ、一緒に読誦し、法華経の真意が的確に理解できるように計らいましょう」

【三八四頁 三行】「法華経を受持し、読誦する人は、／（『我が身を見ることを得て、甚（はなは）だ大いに歡喜（かんぎ）して転（うた）た復（また）精進せん。我を見るを以ての故に即（すなわ）ち三昧及び陀羅尼（だらに）を得ん』）私をただ心に思い浮かべるだけで、大いに歓びを感じ、一層の精進を励むことができるようになります。私をただ思い浮かべるだけで、常に心の乱れがなくなり、善をすすめて悪をとどめる力を得ることが出来るようになります。そればかりかその善をおしすすめる影響は百千万億という人々に影響を及ぼします。そして真理の教えを自由自在な方便をもって説く力を、身に付けることが出来るでありましょう」

【三八四頁 七行】「世尊よ。もし濁悪世（じょくあくせ）の末法の時代で、男女の出家・在家の修行者が法華経を心から求め、教えを受持・読誦・書写し、法華経の実践に努めようと望むならば、／（『三七日（さんしち にち）を満じ已（おわ）らんに、我當（われ まさ）に六牙（ろくげ）の白象に乗って、～ 身を以て其の人の前に現じて、爲（ため）に法を説いて示教利喜（じきょうりき）すべし』）三七日（三週間）、一心に精進しなければなりません。そして三七日（三週間）の精進が満行（まんぎょう）した時、私は六牙（ろくげ）の白象に乗って、大菩薩たちと共に一切衆生が歓喜して見るような姿となってその場所に現われましょう。そして、法華経を説き、その人を順序次第に従って導いていきます」

【法華経実践者を守護する総持真言『陀羅尼』を、普賢菩薩が唱える】――

【三八四頁 終行】「私はそれらの人々に**総持真言(そうじしんごん)**を与えましょう。この総持真言は、人間以外の魔物から脅（おびや）かされるものではありません。また異性から誘惑されても惑（まど）わされることなどありません。私はその人を常に守護いたします。世尊よ。願わくは、この総持真言を説くことをお許しください」

【三八五頁 三行】そう申し上げた**普賢菩薩**は、釈尊の御前で神呪（しんじゅ）を唱えました。

【経典 裏 十二頁 一行】「阿檀地（あたんだい/無我よ）一 壇陀婆地（たんだはだい/小我を除くことよ）二 壇陀婆帝（たんだはて/我方便を破することよ）三 ～ 薩婆薩埵（さるばさった）・楼駄憍舎略（るだきょうしゃりゃ）・阿耨伽地（あとぎゃだい/一切衆生の声を悟ることよ）十九 辛阿毗吉利地帝（しんなびきりだいて/獅子が自由自在に遊戯することよ）二十」

【総持真言『陀羅尼』を受ける功徳】――

【三八五頁 終四行】「世尊よ。もし菩薩行を実践している人がこの神呪（しんじゅ）を耳にすることができたならば、普賢菩薩の神通力によって守護されていることを知らなければなりません。／（『若（も）し法華經の閻浮提（えんぶだい）に行ぜんを受持することあらん者は、此の念を作（な）すべし。皆是（みなこ）れ普賢威神（いじん）の力なりと』）**法華経**を世界中に広め、**法華経**を受持する者は、自分に普賢菩薩の偉大なる神力を得ていることを自覚しなければなりません。この法華経を受持・読誦し、教えの内容を深く理解して、しかもそれを正しく記憶して修行精進する者は、ほかでもありません。／（『當（まさ）に知るべし、是（こ）の人は普賢の行を行ずるなり』）❶**普賢菩薩と同じ行いを行じている人**なのです。しかもその人は／（『無量無邊（むへん）の諸佛の所（みもと）に於て、深く善根を種（う）えたるなり』）❷前世から無量無辺という無数の仏に仕えて精進し、**諸々の善根を積んだ人**なのです。／（『諸（もろもろ）の如來の手（みて）をもって、其の頭（こうべ）を摩（な）でたもうを爲（え）ん』）ですから ❸**『如来の子である』**として仏から頭を撫（な）でられている人であります」

【三八六頁 二行】「もし法華経をただ書写しただけでも、その人は寿命が尽きた後、**忉利天**(とうりてん)という天上界に生まれ変わることができましょう。そこでは八万四千人という多くの天女たちが美しい音楽を奏（かな）でて迎え入れ、七宝（しっぽう）の冠（かんむり）を着けた官女（かんじょ）たちが使い人となって安楽な暮らしを送ることができるでありましょう。ましてやこの教えを受持・読誦して教えの内容を深く理解し、それを正しく記憶して修行・精進する人が亡くなろうとする時、千の仏が手を差し伸べてくれ、死を恐れることもなくなります。しかも**四悪趣**(しあくしゅ)という**地獄・餓鬼・畜生・修羅**の悪道の世界に落ちることもありません。そして**兜率天**(とそつてん)という天界において、この世で釈迦牟尼仏の次に仏と成る**弥勒菩薩**のそば近くに生まれ変わることになるでしょう（弥勒菩薩のように慈悲を具えて、菩薩行に励む身となることでありましょう）。この弥勒菩薩は、仏さまと同じ三十二の徳相を具え、多くの大菩薩方に囲まれて百千万億の天女や家来たちに仕えられている大菩薩です。そういう大菩薩のもとに生まれ変わるというのですから、これ誠に甚大な大功徳であると申せます」

【三八六頁 終三行】「そういうわけですから、本当に**智慧ある者**は、この法華経を自ら一心に書きとめ、人にも書くことを薦（すす）めなければなりません。そして教えを受持・読誦して内容を深く理解し、正しく記憶して教えの如く修行しなければなりません」

【三八六頁 終行】「世尊よ。神通力をもって、この教えを護（まも）ります。教えを広め、実践する人を、私は神通力をもって守護します。そして、如来がお亡くなりになられた後においても、この教えを世界中に広めて絶えることがないように致します」

【法華経実践者を守護することを、釈尊も誓う】――

【三八七頁 二行】 **釈迦牟尼仏**はその言葉をお聞きになると満足そうに頷（うなず）かれ、**普賢菩薩**を讃えました。そして次のように仰せになりました。

「善いかな。善いかな。普賢よ。そなたはこの法華経を護（まも）り、世に広まることを助け、衆生が多くの利益（りやく）を得て幸福になれるように計らってくれました。素晴らしいことです。そなたはすでに数えきれない甚大な功徳を成就し、大きな慈悲を具えている大菩薩です。しか

もはるか永遠の昔から仏の悟りを得ようという志を立てており、精進を重ね、そしてこの法華経を守護しています。／（『我當（われ まさ）に神通力を以て、能（よ）く普賢菩薩の名を受持せん者を守護すべし』）**普賢菩薩と同じ心で修行する者を、私も神通力を以って守護しましょう**」

【法華経を実践する者は、釈尊から直接に法を得る者】――

【三八七頁 六行】「普賢菩薩よ。もしこの法華経を受持・読誦し、教えの内容を深く理解して、それを正しく記憶し、さらには繰り返し修行精進して教えを書き写し、人に広める者は、／（『是（こ）の人は則（すなわ）ち釋迦牟尼佛を見るなり、佛口（ぶっく）より此の經典を聞くが如し』）まさにその人**は釈迦牟尼仏を見る人**であります。そればかりか**釈迦牟尼仏の口から直接、説法を聞く人**と同様であると言えます」

【三八七頁 終五行】「まさに知らなければなりません。法華経を受持・読誦し、実践する人は、**釈迦牟尼仏を供養する人**にほかなりません。そして仏から**『善哉。善哉』と褒(ほ)められる人**です。さらに**釈迦牟尼仏から直接頭を撫(な)でられ、心から信頼を寄せられる人**です。またいつも**釈迦牟尼仏の衣に覆われ、仏からしっかりと抱(いだ)かれて仏と一体となっている人**です。このような人は世間の通俗的な楽しみを貪（むさぼ）り、そのことにとらわれ、仏教以外の教えに固執することなどありません。娯楽の文書に没頭してそこから抜け出せなくなることもありません。また、自分から進んで獣（けもの）を売って生計を立てる者や猟師、そして女色（じょしょく）を食いものとする職業の者に近づくことなどありません。

【三八八頁 二行】「この人は／（『心意質直（しんに しちじき）にして』）**誠実で正直、素直**であり、／（『正憶念（しょうおくねん）あり』）**真理に合致した考え方**ができているために、／（『福德力（ふくとくりき）あらん』）**多くの人を幸せにする力**を具えています。そしてこの人は、**『貪・瞋・痴』の三毒**に悩まされることもありません。また**嫉妬・我慢(慢心)・邪慢(じゃまん/無反省の心)・増上慢(悟ってもいないのに悟っていると思い込むこと)**に心を毒することもありません。この人は／（『少欲知足にして能（よく）普賢の行を修せん』）**『少欲知足』**で、普賢菩薩のように法華経を徹底的に実践するでありましょう」

【三八八頁 四行】「普賢よ。もし末法の世に於いて法華経を受持・読誦する者を見たならば、次のように思ってよいでしょう。それは『**この人は長い時を経(へ)ずして、諸々の魔の大軍を打ち破って仏の悟りを得る人である。**そしてあたかも太鼓やほら貝が響きわたるように法華経を説き広め、大雲から降り注がれる慈雨の如くこの世を潤（うるお）すでありましょう。しかもこの人は、天上界・人間界の全ての者たちの中で最高の座・地位に就（つ）くことになり、多くの尊敬を受ける人であります』と思ってよいでしょう」

【三八八頁 終五行】「普賢よ。仏の滅後において法華経を受持・読誦する者は、衣食住にとらわれて貪欲・執着の日を送ることはありません。／（『所願（しょがん）虚（むな）しからじ。亦（また）現世に於て其の福報（ふくほう）を得ん』）その人の願うことは、**『事物による願望成就』**ではなく**『心の解脱』**であり、その**願いは必ず叶えられる**でありましょう」

【法華経を実践する者を謗(そし)る罪】――

【三八八頁 終三行】「もしある者が、法華経を信じて行じている人に対して『おまえは正気を失ったのか。そんなことをして何になる。馬鹿な奴だ』と謗(そし)り、軽蔑するならば、その批判する者は、何度生まれ変わっても盲目の身(正しく物事を見ることが出来ない人)となって生まれることになるでしょう。反対に、／(『當(まさ)に今世に於て現(げん)の果報を得(う)べし』)法華経を信じ行ずる人を供養し、讃歎する人は、今世において現実の果報を具体的に得ることでありましょう」また、この法華経を受持する人を見て、その人の上げ足をとったり、粗(あら)探しをしたり、それを世間に吹聴(ふいちょう)するようなことをするならば、その**事実の有無を問わず、法華経行者を謗(そし)る者は**、今世において白癩(びゃくらい)という病気の身(心が腐り、不満の人生を送ること)となるでありましょう」

【三八八頁 終三行】「もし法華経を信ずる人をあざけ笑うようなことがあったならば、そのあざけ笑う者は、生まれ変わり死に変わりしても、醜い姿となって生まれ続けるでありましょう。その醜い姿とは、歯の間が空(す)き、唇の形が醜く、鼻が平たくで、手足が曲がり、目つきが醜く、体から異臭を放ち、悪性の出来物が体じゅうにあり、膿(う)みただれ、腹水がたまってお腹が大きく、結核などの重い病気を持つ身となるでありましょう。そのようなわけですから、普賢よ。この法華経を受持する者に対して、／(『當(まさ)に起(た)って遠く迎(むか)うべきこと、當(まさ)に佛を敬うが如くすべし』)たとえ遠くにその姿を目にしたとしても、仏と同じように敬わなければならないのです」

【『普賢菩薩勧発品』を聞いた無数の菩薩たちが感動、大歓喜】――

【三八九頁 七行】すると、この**『普賢菩薩勧発品』**を伺った恒河沙(ごうがしゃ)というガンジス河の砂の数ほどの**無数の菩薩たち**は、百千万億人に及ぶ陀羅尼(だらに／善をすすめ悪をとどめる大きな教化力)を得ることができました。／(『三千大千世界微塵(みじん)等の諸(もろもろ)の菩薩普賢の道(どう)を具(ぐ)しぬ』)そして三千大世界を微塵(みじん)にした数いう無数の菩薩たちも、普賢菩薩と同じ法の実践力を身に具えることができたのでありました」

【三八九頁 終三行】こうして**釈迦牟尼仏**がこの法華経の教えの全てを説き終えられると、普賢菩薩をはじめとする諸々の菩薩たちや、舎利弗をはじめとする声聞たち、およびこの法会に参集した天人・竜神・鬼神・人間・人間以外のさまざまな生ある者たちは、／(『一切の大会(だいえ)皆大(おおい)に歓喜し、佛語を受持して禮(らい)を作(な)して去りにき』)体全体に**大歓喜**を覚え、**仏さまの言葉**の一言一言をしっかりと**胸に刻み込むように受持し**、世尊を伏し拝んで礼拝し、その場を去って行ったのでありました」

「勧（かん）発（ぼつ）」とは

(P401・1 行／P299・1 行)

『**勧発**』とは、**「元気づけ、励ます」**という意味です。すなわち、これまでの二十七品にわたって法華経の説法を聴聞（ちょうもん）し、その教えを受持・実践しようという**決意を固めた大衆を、普賢菩薩が元気づけ、励ます、力強い言葉に満ちた品**であります。誠に法華経の結びにふさわしい章と言わなければなりません。

普賢菩薩（ふげんぼさつ）の四つの行（ぎょう）

(P402・8 行／P300・4 行)

《普賢菩薩勧発品》と次の《仏説観普賢菩薩行法経》をよく読んでみるとわかるように、**普賢菩薩**はつぎの四つのはたらきを兼ねそなえた菩薩であります。

❶みずから法華経の**教えを実践する**。
❷法華経の教えをあらゆる迫害から**守護する**。
❸法華経を実践する者が自ら招く**「功徳」**と、それを迫害する者が自ら招く**「罰」**を**証明する**。
❹法華経に背（そむ）いた者も、**「懺悔」**することによって**「罪から解放」**されることを**証明する**。

法華経（ほけきょう）を成就（じょうじゅ）する四つの条件（じょうけん）

(P412・8 行／P308・2 行)

『**法華経を得（う）**』というのは、単に法華経に会うということではなく、**法華経に会った人が、それ(法華経)を本当に自分のものにするということ**です。そうしてこそ真の功徳を得ることもできるのです。そのためには**四つの条件が必要**であると教えられています。

❶《信仰の確立》「諸仏に護念(ごねん)せらるることを為(え)」。
自分は諸仏に護られているという絶対の信念を持つこと。

❷《善行を積む》「諸(もろもろ)の徳本を植え」。
「善い心」を育てるとは一体何でしょうか。なかでも「善い行いをすること」が第一です。
～ **「善い行いをする」こと**が、とりもなおさず、その人の心に**「徳の根」**を育てることになり、法華経の教えがその人の身に生きて来るわけです。

❸《正しい目的の集団に入る》「正定聚(しょうじょうじゅ)に入(い)り」。
正しいことの決定した者の集まりに入る。～ 信仰の力が二倍にも三倍にもなる。

❹《みんなと共に救われるという精神》「一切衆生を救うの心を発(おこ)せるなり」。
自分だけが悟り、救われるというのでは、本当の成道（じょうどう）ではないのであって、自他ともに救われることで、この世に理想国土を建設するというのが大乗思想の根本です。
～ とくに法華経では、積極的に**〈社会全体を救う〉**ことをめざすよう、強調しています。

四法成就（しほうじょうじゅ）

(P419・終4行／P313・1行)

以上の四つをきわめてやさしい言葉にまとめてみますと、次のようになります。

❶**自分は仏さまに生かされ、守られている**のだということを、**確信する**こと。

❷**いつも善い行いをする**ように**心がける**こと。

❸**いつも正しい信仰者の仲間**に**入っている**こと。

❹**いつも社会全体を良くする**ことを**目指す**こと。

お釈迦さまのみ心を拝察するならば、「今まで色々難しい教えを説いてきたけれども、それを実践するには、つまりこれだけのことを**心がければいい**のだよ」と、平易にまとめて下さったのであろうと思われます。法華経の教えの深遠(しんえん)さに、少したじろぎ気味だった人たちも、これを伺って、何か新しい勇気の湧き起る思いをしたことでありましょう。

《思惟（しゆい）のひととき　①》

仏の滅後、如何にして法華経を得ること（身に具える）ができるのか？の問いに、釈尊は**『四法成就』**という四つの条件を説かれ、その第一条件として、**「諸仏に護念(ごねん)せらるることを為(え)」**を示し、『**自分は仏さまに生かされ、守られている**のだということを**確信する**ことだ』とされました。 ── では、仏の滅後の現代。私は、この法華経を身に具えるための条件として、『**自分は仏さまに生かされ、守られている**ことを**確信**』しているか。 振り返ってみましょう。

《思惟（しゆい）のひととき　②》

では、**『四法成就』**の第二の条件である**「諸(もろもろ)の徳本を植え」**。すなわち『**いつも善い行いをする**ように**心がける**こと』という教えを、私は日ごろ心がけているでしょうか？　また、実践しているでしょうか？　振り返ってみましょう。

正（ただ）しい目的（もくてき）の集団（しゅうだん）にはいる

(P417・1行／P311・3行)

仏法では、人間の集団を次の三つに分けています。

《正定聚(しょうじょうじゅ)》 正しい教えを信ずる人々の団体をはじめ、親切運動、社会奉仕の団体などが、それにあたります。

《邪定聚(じゃじょうじゅ)》 悪いことに決定（けつじょう）した者の集まり。

《不定聚(ふじょうじゅ)》 善にも悪にも定まっていない人たち。凡夫の大抵はこれであって、善にも赴くけれども、悪へ走ることもありうるという、グラグラしたものです。

我々信仰者は～ お互い教えあったり、励ましあったり、退転を引き止め合うことができます。～ お互いの心がしっかりと結び合って、信仰の力が二倍にも三倍にもなるものです。

《思惟(しゆい)のひととき　③》

『四法成就』の第三の条件である**「正定聚(しょうじょうじゅ)に入(い)り」**。すなわち『**いつも正しい信仰者の仲間**に**入っている**こと』という教えを、あなたはどのように受け止めていますか？
その『**正定聚**』の**必要性**、**大切**さをどのように受け止めているでしょうか？
また、その『**正定聚**』に多くの人を導き入れようと考えているでしょうか？

《思惟(しゆい)のひととき　④》

『四法成就』の第四の条件である**「一切衆生を救うの心を発(おこ)せるなり」**の教えは、『**いつも社会全体を良くすることを目指すこと**』であると庭野開祖は説きます。　―― では、この『**いつも社会全体を良くすることを目指すこと**』とは、どのようなことを意味するのか？　そして、私にとって『**いつも社会全体を良くすることを目指すこと**』とは、具体的にどのようなことを意味するのか？　何をすることなのか？　かみ締めてみましょう。

濁悪世(じょくあくせ)

(P423・4 行／P315・終行)

濁り切った悪い世。その濁りの原因やありさまを分析して、五つに分けています。

『五濁(ごじょく)の悪世』。

❶**【劫濁(こうじょく)】**――　同じような時代が長く続いたために、自然と濁りが生じ、悪い症状が起こったもの。**マンネリ。形骸化(けいがいか)**している状態。

❷**【煩悩濁(ぼんのうじょく)】**――　人々の煩悩がますます盛んになるために起こった濁り。時代の発展と共に、**価値観が多様化して世の中が複雑化**するために起こる障り。(**煩悩・我慢がますますさかん**になるために起こる濁り。) 昔、生活も社会のしくみも単純化していた。

❸**【衆生濁(しゅじょうじょく)】**――　社会の構造が複雑になるにつれて起こるもの。**みんながそれぞれの立場からものを考え、主張する**ことによって生じる弊害。また、法律さえ触れなければ、何をやってもかまわないという考えを主張する世の中。(**「譲る精神」が少なく**なり、全体の調和を害する**「我」「立場」を一方的に通す**。)

❹**【見濁(けんじょく)】**――　ものの見方が邪 (よこしま) になっているために起こる世の濁り。**正邪の別があいまいになった世の中**。たとえば本能のままに (好きなように) 生きるのが「人間らしい生き方」だという考え方がまかり通る世の中。(**邪見(じゃけん・狭い自己本位の見方)が横行**して正見を蔽 (おお) ってしまう)

❺**【命濁(みょうじょく)】**――　人間の命が短くなるために起こる世の濁り。**目前の利益や、すぐに効果のあがることばかりを追い求め、人の心がこせこせした小さな人間となってしまう**。**「永遠の生命」**を見つめることがなく、社会に醜 (みにく) いゴタゴタが絶えず起こる世の中。

『世尊、後の五百歳濁悪世の中に於て、其れ是の経典を受持することあらん者は～ 我當に守護して』　(三八三頁 四行)

『若し法華經に於て一句・一偈をも忘失する所有らば、我當に之を教えて与共に讀誦し、還って通利せしむべし』　(三八四頁 二行)

もし、法華経の一句または一偈 (いちげ) を忘れてしまったならば、私はそれを教えてあげ、一緒に読誦して、その真意に通達 (つうだつ) するようにしてあげましょう。

⟹ 一偈一句を忘れてしまったら、それを教えてあげる・・・というのは、むろんそのままの意味ではなく、「いくら考えても**〈教えの真意〉がつかめない時は、まず〈実践〉ということに思いをめぐらしてみれば、必ずその真意に到達する**ことができる」という意味です。

《思惟のひととき ⑤》

「**〈教えの真意〉がつかめない時は、まず〈実践〉ということに思いをめぐらしてみれば、必ずその真意に到達する**ことができる」と庭野開祖は説きます。

― 「実践をする」ことによって「教えの真意」を掴むことができる。到達することができるというこの教えを、あなたはどのように受け止めますか？　かみ締めてみましょう。

精神の習慣をつくる

(P438・4行／P327・4行)

（休みの日に一日だけでもよい、世事（せじ・世の中の出来事）を忘れて写経し、読経し、教えを学び、教えを思索し、同信の仲間と法について語りあうことが）なぜ必要かと言えば、行為に「習慣」というものがあるように、精神にも「習慣」というものがあるからです。或ることを深く考え、切実に思い、それを繰り返すならば、いつしか**「心の習慣」**になってしまいます。～ ある期間、ほかのことをうち忘れて一心にひとつのことを思いつづけると、それが精神の習慣となります。～ もし三七日（二十一日間）一心に精進するならば、その期間に培われた精神的習慣は、少なくとも半年ぐらいは持続するでしょう。そしてそれを数回繰り返せば、おそらく一生のものになるでしょう。～ **〈行〉の意義は、そこにあるのです。**

《思惟のひととき ⑥》

「ある期間、一心に〈行〉につとめ、そのことを繰り返すならば、それが〈心の習慣〉となり、一生のものとなる」と庭野開祖は説きます。これは、「善い行」をある期間、繰り返すならば、それが「一生のもの・精神の習慣」となり、反対に「悪い行」をある期間、繰り返していくと、それが「一生のもの・精神の習慣」となるという意味になります。

― この教えをあなたはどのように受け止めますか？　かみ締めてみましょう。

『三七日を満じ已らんに、我當に六牙の白象に乗って～ 其の人の前に現じて』

三週間（二十一日間）の実践を終えれば、私は六牙（ろくげ）の白象に乗って～ 人々の前に姿を現わしましょう。　　（三八四頁　終四行）

《思惟のひととき　⑦》

『三七日を満じ已（おわ）らんに、我當（われまさ）に六牙（ろくげ）の白象（びゃくぞう）に乗って～ 其の人の前に現じて』　―（三七日の行を）満行すれば、『普賢菩薩』の方から「やって来る」というこの経文を、あなたはどのように受け止めますか？　　かみ締めてみましょう。

『此の経を読誦せば、我爾の時に六牙の白象王に乗って～亦法華經を供養せんが爲の故なり』

（三八三頁　終三行）

徹底した実践

（P428・終３行／P319・終２行）

象は〈実践〉の象徴です。しっかりと踏みつけて歩いて行く象は〈徹底（底まで徹する）〉した実践の象徴とも言われているのです。～

ややもすれば、「自分は法華経行者であるから、必ず加護がある」と独善的に考えている人がありますが、それは思い上がりというものであって、いくら形の上で法華経行者であろうが、**ほんとうに教えを実践しない者に加護も功徳もあるものではありません**。この一句は、そのような個人主義的増上慢に対する戒めだと思います。

《思惟のひととき　⑧》

象は〈実践〉の象徴。しっかりと踏みつけて歩いて行く象は〈徹底（底まで徹する）〉した実践の象徴とも言われている。しかも「いくら形の上で法華経行者であろうが、ほんとうに教えを実践しない者に加護も功徳もあるものではありません」と庭野開祖は説きます。

―　この教えをかみ締めてみましょう。

『若し法華經の閻浮提に行ぜんを受持することあらん者は、此の念を作すべし。皆是れ普賢威神の力なり』世界中に広めるための法華経を受持する者は、自分に普賢菩薩の偉大なる神力が及んでいるのだということを、しっかりと自覚しなければなりません。　（三八五頁　終三行）

『❶當に知るべし、是の人は普賢の行を行ずるなり。❷無量無邊の諸佛の所に於て、深く善根を種えたるなり。❸諸の如來の手をもって、其の頭を摩でたもうを爲ん』

（三八五頁　終行 ）

❶この法華経を受持・読誦し、教えの内容を深く理解して、しかもそれを正しく記憶して修行精進する者は、ほかでもありません。普賢菩薩と同じ行いを行じているのだと知らなければなりません。❷しかもその人は前世から無量無辺という無数の仏に仕えて精進し、諸々の善根を積んだ人です。❸ですから、（『如来の子である』として）仏から頭を撫（な）でられている人であります。

❶「是の人は普賢の行を行ずる」

―　法華経の教えを実践する人は、その人自身が**『普賢菩薩』**。

❷「無量無邊の諸佛の所に於て、深く善根を種えたる」

―　法華経を受持することができた人は、**『過去世、仏のもとで精進した人』**

❸「如來の手をもって、其の頭を摩でたもうを爲ん」

―　法華経の教えを実践する人は、**『（如来の子として）仏から信頼されている人』**

『是の人～　即ち兜率天上の彌勒菩薩の所に往かん』　（三八六頁　七行）

（法華経の教えを実践する）この人は～　兜率天上（とそつてんじょう）にいる弥勒菩薩のそば近くに生まれ変わることができましょう。　（P458・2行／P342・8行）

弥勒菩薩の所へ行くということは、弥勒菩薩のような**『慈悲の心』**を具えて、日々**『菩薩行に励む身』**となるという意味です。～　ある意味では、**『最高の菩薩』**ということができます。～　この娑婆世界に於いて**『慈悲の行い』**を続け、そのことに**『最高の生きがい』**と**『喜び』**をおぼえる人間になるということを象徴しているわけであります。

『是の故に智者、～説の如く修行すべし』　（三八六頁　終三行 ）

智者の条件

（P461・5行／P345・4行）

本当の意味で賢明（けんめい）な人。人生の意義を本当に理解し、真理にそった生き方をする人。智者たるの条件は、およそ次の通りであります。

❶物事の**是非(ぜひ)善悪**をよくわきまえている人。

❷自分のすること（言動）が、**どんな結果を生み、他にどんな影響を及ぼすか**を、予（あらかじ）め見きわめることのできる人。

❸自分がこの世の中で**どんな位置を占めているか、どんな役目を持っているのか**、それがよくわかっている人。

❹**人を愛し、人と調和すること**の高貴な喜びを知っている人。

❺どのような生き方が**人間らしい、意義ある生き方であるかがよくわかり**、**世の中全体をも良くする道を知り、あるいは考えだす**ことのできる人。

《思惟のひととき ⑨》

庭野開祖が示す以上の５つの『智者の条件』を自分に当てはめてみると、どのようなことが言えるでしょうか。　振り返ってみましょう。

『若し是の法華經を受持し、讀誦し、正憶念し、修習し、書写することあらん者は、當に知るべし、是の人は則ち釋迦牟尼佛を見るなり、佛口より此の經典を聞くが如し』

（三八七頁　六行）

もしこの法華経を受持・読誦し、教えの内容を深く理解して、それを正しく記憶し、さらには繰り返し修行精進し、教えを書き写し、人に弘める者は、まさにその人は釈迦牟尼仏を見る人であります。そればかりか釈迦牟尼仏の口から直接、説法を聞く人と同様であると言えます（法華経）を信じ、一心に学ぶ者は、お釈迦さまの滅後においても**「（お釈迦さまに）直接お目にかかるのと同然だ」**というのです。～　まことに大事な一句であります。　（P466・3行／P349・5行）

大乗的救いの極致

（P474・1行／P355・終2行）

『是の人は❶心意質直にして、❷正憶念あり、❸福德力あらん』　（三八八頁　二行）

◎「大乗的な救いに導く」三要素――

❶『心意質直（しんに しちじき）にして』――　心に飾りけがなく真っ直ぐ。すなわち真理（妙法）に対して素直であるということ。

⇒　自然と考えることが**無意識のうちに真理と合致**する。

❷『正憶念（しょうおくねん）あり』――　ものの見方が正しく、常に真理に一致する。

⇒　意識して**考えることが全て真理に合致**する。

❸『福德力（ふくとくりき）あらん』――　自分が救われるだけでなく、他を救う力を備える。

⇒　**大乗的な救いの実践者**となる。

少欲知足

（P479・4行／P360・3行）

『少 欲』――　世間的な欲が少ない。金銭的・物質的な欲ばかりでなく、地位・名誉・権勢・人の愛情や奉仕を**求める欲が少ない**。～　だからといって真理（妙法）を求める心は盛んでなければならない。～　真理に対してまで無欲なのは、**人生の怠け者**であり、はなはだ**価値の低い人間**。

『知 足』――　足ることを知ること。自分の境遇に満足していることです。～だからといって向上心がないというのではありません。悠々（ゆうゆう）としているわけです。現在の仕事（置かれている立場）では、ベストを尽くし、伸ばすことには懸命です。

自然の供給

(P483・6行／P363・6行)

『是の人復衣服・臥具・飲食・資生の物に貪著せじ。所願虚しからじ。亦現世に於て其の福報を得ん』　(三八八頁　終四行)

「普賢よ。仏の滅後において法華経を受持・読誦する者は、衣食住にとらわれて貪欲・執着の日を送ることはありません。その人の願うことは、『**事物による願望成就**』ではなく『**心の解脱**』であり、その願いは必ず叶えられるでありましょう」

本当に仏法に徹した人は、そういう物（資生・しせいの物）に貪欲と執着を持たないのです。なぜならば、そのような人には、**必要なものは必ず自然と供給される**からです。〜巡り巡ってやってくるのです。まったく不思議なことですが、**事実です**。

※　「道心（どうしん）の中に衣食（えじき）あり、衣食の中に道心なし」　（伝教大師　最澄）

法種を断つ罪

(P485・1行／P364・終5行)

正しい教えの広まるのを妨害するような言動は、法律的には罪にはなりませんけれども、その影響はじつに甚大なるものがあります。もしその教えが順調に広まって行けば、どれくらい多くの人が幸福を得るかわかりません。また、どれだけ多くの人が悪の道から更生するかわかりません。そういう末広がりにどこまでも広がって行くはずの教えの流れを、ハタと断ち切ってしまうことを、**〈法種を断つ／ほっしゅ を たつ〉**と言いますが、その罪の深さは計り知れないものがあるのです。

法華経最後の句

(P493・3行／P371・6行)

『一切の大會皆大に歡喜し、佛語を受持して禮を作して去りにき』(三八九頁　終二行)

誠に感動に溢れた　、幕切れの場面です。王舎城（おうしゃじょう）の町の向こうに連なる山々の上には、星の光がキラキラと見えはじめていたことでしょう。〜 それを眺（なが）めながら下山する大衆は、本仏さまの懐（ふところ）にしっかりと抱（いだ）かれている思いを、一歩一歩にかみしめていたことでありましょう。

《思惟のふりかえり　まとめ》

今日の『普賢菩薩勧発品第二十八』の学びを通して、何を学び取ったか？
（または、何を一番強く感じ、受け止めることができたか？）　振り返ってみましょう。

合　掌